

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	漂泊の心 : 短歌
Author(s)	富永, 雄載
Citation	龍南會雜誌, 163: 81-82
Issue date	1917-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6708
Right	

起き出でて空を眺むる足裏に今朝は冷たき宿の借下駄

劍とりて

三二

生

黎明の柱に倚れば何となく不安の増しぬ試験近づく
集ひては戦の日を語りあふ合宿の冬夜深うして
年老いし母の言葉を正しとは思へど背く吾なりし哉
たらちねは如何思すらむ劍を捨てよと文見る度に狂はしき兒を
母に背き便りせぬ日の重なればおどおどと湧く不安の思ひ

漂泊の心

三三 富 永 雄 載

かにかくにふるさとの灯の見なければ心うれしくて口ずさみをし
妹も母も病めればたゞひとりもだして飯はむ淋しき心
ほゝ笑みて火鉢をかこみ座してありとはに離れし二つの心
心にもあらで母をばのゝじりしあとの淋しさはまゝもなし
しんしんと雪ふりつもるこの夜ふけせき入り給ふ母はかなしき

凡てをすて只一心につとめなん世にも尊き自らのため
憂き事の數々せまる身にしあれど男の子てふ名には、笑みぬわれ
やるせなき心をのせてたそがれの吹雪する野を汽車は走れり
物思ふ子が乗りて居りいつまでも汽車よ吹雪の野を走り行く
生れし地^あにゐてもなごまぬこの心わが世いつこへ行かばやすけき
ほしゝまゝに物思はするわがへやの淡き灯影の夜のしづもり
なぐるやうに机にもたれ物思ふ悲しきくせのいつかやむべき
日ごと夜ごと悲しみになれこの頃は其のかなしみも捨て難くあり
人住まぬひろ野に出でて三日四日高く呼ばはむわがねがひなり

□ 白 雪 行 □

送るとて門に出づればほのぼのと月は大野の雪をてらせり
ほのぼのと月はてらせり音もなきこの小夜ふけの雪の大路を
人の夜のけがれ埋むと夜もすがら南の國に雪ふりつもる
これやこの神の住みますしろがねのうてなの中を歩み行く身は